

木原さんの研究室のロッカーには、出張授業で教えた中学生たちの写真が貼ってある。「私は外部の人間なので、せめて名前を覚えて話し掛けたい」という(東京都江東区・京都大)

WYSH教育

どう生きるかを考える

私語がやまない教室、将来に夢が持てない子どもたち。いじめ、学級崩壊…。深刻な問題を抱える学校を変えたいと、京都大医学研究科の木原雅子准教授(社会疫学)が提唱する「WYSH教育」(どう生きるかを考える教育)が注目を集めている。学力低迷に悩む九州の中学校から依頼を受け、実践した出張授業の記録を著作にまとめた木原さんは「彼らは問題児ではなく、問題を抱えている子ども。糸が絡まった時は無理に引っ張らず、時間と忍耐をかけてほぐせば、必ず糸を開いてくれる」と静かに話す。(道又隆弘)



WYSH(ウイッシュ)教育 英語の「Well-being of Youth in Social Happiness」(若者の真の幸福、の意)を表し、元は青少年のエイズ予防教育として始まった。木原さんが理事長を務める日本こども財団が主体となり、事例集の出版や研修会開催などを行う。8月に教員向け研修会を京都大医学部(東京都江東区)で開催。9～10日(受け付け終了)11～12日は中学・高校向け、17～18日は小学校向け。詳細は同財団ホームページ075(753)4354—平日午前9時～午後4時。

彼らは問題を抱えている子ども。絡まった糸は、時間をかけてほぐしたい



木原さんは約15年にわたる、全国の小中学校で教員たちと共に、新着あちの学校が合った。子どもたちの向き合ってきた、新着あちの学校が生まれ変わった驚きの授業「T中学校65分白物語」(ミネルヴァ書房)は、宮崎県小中学校を約2年間(計6回)のランティアで訪れ、出張授業などを重ねた足跡だ。「T中学校から『死んだ状態は脱したが、低い声でうろかしたい』との声があったのは3年前。事情を尋ねると

欠かせぬ自尊感情と信頼

教師たちは敬意を持って多様な学習プログラムを工夫し、生徒の服装や態度にも乱れはなかった。しかし、教室で机を並べると、問題が見えてきた。教師は「これくらい分かるはず」という空気をまき、授業をどんどん進める。一方、生徒らはプリントの課題をしても、理科の表紙をきめていないようにした。木原さんと5人生徒のことを知ると、4、5人ずつの面談を行う。最初は警戒していた子ども、級友の紹介や好きなものバズと、好きな、嫌いな課目を選ぶなど、表情が緩んだ。用意したニュースや菓子に手を伸ばし、「補習は行

きにくい」と質問するところが分かんなく、打ち明けた。「生徒にやる気がないと嘆くのは簡単だが、課題を与えて『やらせっぱなし』にして。偏食を直すのと同じく、食べる意味を理解させ、食べたくなる土が必要。まず、生徒たちがいま置かれている状況を把握でき、すべきことを自分で考えられるように掛け、思春期は体と心のバランスが崩れやすいことを伝え、卒業までの目標や、なぜ勉強するかを自問してもらった。教師たちにも中



意見語り、他者に耳を傾ける

次に出張授業を頼まれたのは、いじめや学級崩壊が相次ぎ「困難校」とされた同県内の中学校。最も状況が深刻な年の一クラスを木原さんは半年間担当し、その様子は今月、NHK・Eテレのドキュメンタリー番組で紹介された。木原さんは少人数での面談に

学時代の写真と当時の恋愛や夢、夢を語ってもらい、生徒との距離を縮めていった。続いて、「やる気を引き出す」「教科別の授業、英語はアニメ」となどのトピックを教材に用い、数学は割引サービスで服を買う設問や、ドーナツの服を想定した連立方程式を準備した。すると生徒たちは互いに助け合ったり、意外な方法で答えを出したり、我儘強く取り組んだ。一方、教師からは変化を評価する半面「教科書から離れた教材に、子どもたちが欠けていたのは自尊感情と他人への信頼。30年教師としてきたけど、なかつたなあとつぶやいた木原さんは「ドキュメンタリーを撮ったと言われたこと、私は期待通りの結果になるかなど自信がなかった。生徒が変わったというより、もともと彼らが持っていた素晴らしいものが出せるようになっただけだ」と話。

2日間で延べ10時間をかけた。「うちのクラス、百点満点の7点(生)が溝を駆け上った。小さな不信の積み重ねが溝を広げていた。光が見えたのは「現状をう捉えるから生徒に『専断』を促すから。8時から、もど静かに授業を教えた」ご話した友達間の緊張関係も、教師に不満を感じた。自分自身も専断もなかった。自分も他人も専断もなかった。自分の意見も語り、進意見に耳を傾ける経験が欠かせないからだと、さらに、高校生からの「死ぬまで以外は何も傷たないために始めた3補習でも生徒は徐々に心を開き、提出用紙に悩みを書く子どもも出てきた。3月、自分たちの成長を実感しようとしたため、過去と未来を見つめよう」と自分への手紙を書いてもった。どの生徒も夢中で書き進める光景に、ベテラン教師は「結局子どもを愛するのは、じつくり話を聴くこと。30年教師としてきたけど、なかつたなあとつぶやいた木原さんは「ドキュメンタリーを撮ったと言われたこと、私は期待通りの結果になるかなど自信がなかった。生徒が変わったというより、もともと彼らが持っていた素晴らしいものが出せるようになっただけだ」と話。